立山に

降り置ける雪を

常夏に

見れども飽かず

神からならし

と立山は、

いかなる

山として映って

語り伝えようとした。通じて、その魅力をの都の人々にも歌を

家持には、二上山

たまく 山 鳴 鳥 0 声 $\widehat{\mathcal{O}}$ 恋 き 時 は来にけり

国守(国の長官)とし家持は、越中の地に家持は、越中の地にの代表的歌人であり、の代表的歌人であり、

かれていた伏木の地て満五年、国庁が置

に滞在した。

高岡市万葉歴史館

ふれる歌の数々は「越

をよみ、その詩情あに三百首以上もの歌

たちは、越中を舞台

家持と部下の官人

中万葉」と呼ばれる。

その「越中万葉」の

と立山つの、

山

二上山

大伴家持は、奈良

歌々の中に登場す

春の特別企画展

越中万葉の

二上山と立



一ふたがみやまー

天平18年(746)に奈良の都から発 律家持が国守として赴任した越中国庁(現 在の県庁に相当)は、二上山の山裾に あった。家持はその二上山を神の山として 讃美している。

越中時代の大伴家持の歌には、「二上山(二上)」という地名は、「二上山の賦」 (巻十七・3985~3987)など、寝歌・短歌を含め8首の歌によみこまれているが、それはあくまでも歌の中に含まれている数にすぎない。麓の国庁で職務に励み、日々の生活を送る家持は、常にこの山の自然を意識し、作歌に励んだことであろう。

現在二上山は富山県高岡市北部に位置する。標高が274mあり、頂上からは、富山平野、立山連峰をはじめ、富山湾や遠〈能登半島が一望できる。そのため、戦略的にも重要な山とされ、中世から近世にかけて西の峰に山城(寺山城)が築かれた。山が二つ並んで見えるポイントが少ないのは、山城が築かれるために削られたからであろう。



大角 勲「天地共生」(金属造形・当館蔵)



立 山 一たちやま一

立山が信仰の山として開かれたのは、平安時代のはじめのことである。しかし、それより以前、大伴家持は「立山の賦」(巻十七・ $4000\sim4002$)で既に立山を神の山として歌によんでいる。天平19年(747)4月27日(現在の6月中旬)、奈良時代のことである。

家持は「立山」を万葉仮名で「多知 夜麻」と書いているので、当時はタチヤマと 呼んでいたことがわかる。タテヤマと呼んだ 確かな例は室町時代まで見られない。

現在「立山」という名は、狭義には、雄山 (3003m)・大汝山 (3015m)・富士の折立 (2999m)の山なみをさし、また広義には、立山連峰の山全体の意味でも使われている。

大伴家持も「渋谿の磯」と歌にうたった富山県高岡市の雨晴海岸からは、天候のよい時には海上遙かに3000メートル級の立山の山並みが海の上に連なるのを望むことができる。



岡田繁憲「雨晴海岸」(日本画·新作)

山ぼめの歌 -国土繁栄を祈る心-

古代において、山は神の降臨する場であり、霊威に満ちた聖なる空間であった。大伴家持は、「二上山の賦」・「立山の賦」で、越中国の国守として、二上山・立山を、共に「すめ神(国の神)」の鎮座する神の山と、山ぼめの歌をよんだ。それは、国守として越中の国の繁栄を祈願することでもあった。

家持は歌の中で、山裾を流れる川についてうたう。二上山については「射水河」い行きめぐれる」と、射水川(現在の小矢部川)が二上山をめぐるように流れるとよみ、また立山については「帯ばせる 片貝河の」と、片貝川を立山の帯にたとえている。

川の流れは、国土に恵みをもたらす。その恵みとは、神のいる山の霊威が川の流れによって運ばれたものと、古代の人々は信じていたのかもしれない。



春の特別企画展「越 中 万 葉 の 山 ―ニ上山と立山―」 期間:平成19年4月18日(水)~5月7日(月) 協力:岡田繁憲・富山県人社・富山県立高岡西高等学校・高岡市立万葉小学校

高岡市万葉歴史館

〒933-0116 富山県高岡市伏木一宮1-11-11 電話:0766—44—5511 FAX:0766—44—7335 E-mail:manreki@office.city.takaoka.toyama.jp http://www.manreki.com